

漢法苞徳塾資料	No. 556
区分	論説
タイトル	人の身体のダイナミズムに関して — 臨床的必要に応ずる経穴選択論と刺法論の研究の方向の問題 — (経絡学会常任委員会の決定した19学会取穴小委員会の討論のために)
著者	八木素萌
作成日	1991.02.13

「鍼灸における『証』について」の討論には、『経絡システム』に内包されていた諸問題が「鍼灸における証」問題の討論の蓄積の結果として、ほぼ洗いざらいに出てきたので、このシステムの改善と強化とが必要になっているという認識が形成されていることと、大いに関連している。

つまり、新しく「改善され強化された経絡治療システム」の基本骨格が提示されなければならなくなつて来ているのである。したがって、20回学術大会への宿題報告が当小委員会に課せられたものと解しない訳にはいかないのである。鍼灸治療のシステム化とは、システム化可能部分と不可能部分とを正當に認識するというに他ならないだろう。そして、これは在来のように、ある「〇〇派」「〇〇学派」と呼び習わされているようなものではなく、日本において東洋医学に意識的に依拠している全ての治療家の人々と、共々に次第に仕上げて行く治療体系の為に基本骨格を提案しているものと、誰もが承認する性質のものでなくてははいけないだろう。

このためには、次の諸点についての概略的な合意が形成されておく必要性があると思われる。

①東洋医学的生命観の基本的観念

②東洋医学の生命観が、生命の実在性を把握している論理としての、三才・動態構造論的平衡観（整体観）

③動的平衡性は、三才における気の交流が実存せしめている、それを人体に実現せしめているものが、元気によって駆動されている衛気栄血であり、この養いを五体にあまねく実現させ、かつ人身の諸組織・諸器官・諸機構の適切な機能発揮を実現させているものとしての経絡体制、その経絡体制は五臓六腑に根差し元気に繋がっている。人身の生理的生活的な諸々の現象は、その性質から五行に配当され、五臓に収斂させて把握される。したがって、五臓概念は幾つかの側面を帯びている。

④生理的・病理的・生活的な人身の諸現象は、五行概念的に収斂把握されている。人身の生活的な諸現象を五行概念的にみなすのは、そのような機能的なものの、概念的な集合のシンボルとしてのものが、五臓概念である。経絡は、そういう五臓の実現機構であるとともに表現体制と

もなっている。そして、その瞬間も停止することのない「運転・運動・変化・転換・転化」のダイナミズムは、人身の「生命・生活」の、この「生きている体制の全要素」において、その総体としてのものが個性であるが、これが多彩であることに由来している。そのような臓腑経絡の五行は、相互に影響し作用を及ぼし合って、たゆまない変化を行っている。つまり、或いは陽であり、或いは陰であり、或いは陽中の陰であったり、或いは陰中の陽であったり、また或いは五行である、或いは五行中の五行であったり、或いは陽中の五行や陰中の五行など等である。

- ⑤それらすべてを「気」として把えることも、その姿こそ「気」に他ならないと強調することも可能である。つまり、瞬時も停止することのない運動・変化のダイナミズムこそ「気」に他ならないと断言できよう。「気」を概念規定することなく融通無礙に無限定に用いれば、実は何も表現しないに等しい。また、概念規定が確かなものとして定義されても、気の態様の種々の様相または側面を具体的に記述できること、そのみならず、諸様相の内に存在している諸々の側面の関連性を、内面的な視点からシステムを描出する手法（つまり、アルゴリズムを描出する手法）で記述できなくては、単に現象を数え立てたに過ぎないことになろう。

森羅万象をすべて「電磁波」が存在しているからであるとすれば解明したと思うのは、そう思う人の勝手であるが、それでは、何一つ認識できていないか、或いは、表現できないことを意味していよう。

「生命とは蛋白質の存在様式である」という定義は、それが最初に語られた当初には、衝撃的なものであったにしても、今日になると、生命に関する知識から見れば空虚なものに響くのであり、生命について何も記述していないに等しいのである。気に関する認識を、この蛋白質論のようなレベルに貶めてはならないことは自明であろう。

したがって、「気」の語を用いる前に、語彙概念を定義しなければならない。

人身のダイナミズムは、

- ①構造
- ②機能
- ③機能せしめるアルゴリズムおよびエネルギー
- ④そのエネルギーの補給もしくは生産や増幅などのシステム

この四要素によって支えられている。

漢法医学にあっては、

- ①……五臓が枢軸となっている、六腑、奇恒の腑、五体、そして経絡の全システム
- ②……構造の要素の職能と相関性的秩序
- ③……陰陽論（易の論理性）、五行論、性理論（中国的な物性論であって、sexの意味ではない）、運氣論として認識されているもの、そして、三才思想にいう「三才の養

い) (天の気—四時・八風……、地の気—後天・飲食……、人の気—先天に稟けるもの・人倫の相関……) が実現するエネルギー伝達 (間中博士は信号系と言い、P. ウンシュルトは影響力の波及する体制と表現している) の体制

- ④……「三才の養い」を最大限に実現し十分な余裕をもって活用する能動的な生活と活動の様式 (養生論と劳逸を厭う病因論や内傷病因論や、五味・五気・昇降などを踏まえた薬食一体論など等)、のように構成されている。

これを現代中医学は整体観と養生論 (練気と食養) として要約的に表現できるようにしていると言える。ハードとソフトと、入力 (インプット) と、出力 (アウトプット) の利用、の四側面にも譬えられよう。

- ⑥東洋医学の『「自然・生命」観』、『整体観 (動態構造論的平衡観)』、整体観の内容 (五体・臓腑・経絡体制・衛気栄血・気血津液・医学的陰陽五行論など等) に関する諸観念、など等が「概略的な合意」の内容となるだろう。

要するに、東洋医学の歴史の中に一貫して来たもの、その基本的な諸概念・諸観念・方法論などは、『内経』の土台の上にあるものである。つまり、東洋医学は『内経』の土台の上で来たものであり、諸学派の形成はあったが、何れの傾向も『内経』の基本的な観念の基礎の上に生じているバリエーションに他ならない、ということがあろう。

#### ◇鍼灸治療学の基礎の建設について

- (イ) 治療学は、診断結果に従って適切な治療方針を建て、その方針を臨床的に貫いて行く問題に関する、論であり術であるものの学であろう。
- (ロ) 鍼灸治療学とは、選択され決定された治療方針を、鍼灸による治療として、臨床的に貫徹する問題に関する学であろう。
- (ハ) 疾患に対する治療的対応の、基本的法則的な側面が治則と言えるならば、その治療法則は東洋医学の歴史が作り上げてきているものであるから、それを今あらためて確認し整頓しておいて、それを、鍼灸治療的に実現していく上に存在している学術的な問題を、解明して行かなければならないものとなっていると言えよう。
- (ニ) 今は、治則を貫徹し実現するための、鍼灸治療学上の諸問題を、系統的・体系的・組織的に検討して、鍼灸治療学の基本骨格を具体的に明らかにして行こうという仕事を、積み上げて行くべきときであろう。その仕事の内容について言えば、

【a】現在までに、記述されている刺鍼手技（技法）は、約 100 種類であるが、その治効的作用や生理的影響作用に関しては、記述が貧弱であり、また、運用しやすいように体系的に分類整理するという面では、殆んど無に等しい。この面での基本骨格の建設が急がなければならない。

【b】穴性に関する記述も、『素問』『靈樞』『難経』に記述されているものでさえも、「体系的な整頓を行った上で、運用に便利なように敷衍されて記述するもの」、つまり、教科書的なものは無に等しい。これらの古典以外の、明代以前の鍼灸臨床の達成を、反映したもの（文献）からの摘出は、殆んど整理もされていない。

個々の名家の手になる鍼灸臨床・経穴学・配穴学・経絡学などにわたる、鍼灸の専門の書となっている著書は見られるが、包括的なものとしては『鍼灸大成』（明・楊繼洲）のみと言えるし、また、中国の歴史が育み育てたところの、自然・世界・宇宙に関する「認識像・世界観」を濃縮し整理した上、鍼灸医学の全般を、『黄帝内经』の注釈と再構成の仕事として、これを達成している『類経（図翼・附翼を含む）』があるくらいである。

最近中国から入っている教科書の、また、「経絡・経穴学」書の記述に満足して良いのかという問題もあろう。経絡・経穴を治療的に運用する上での、種々の側面が基本的に整理され記述される必要がある。

『経書の段階』『経書の敷衍・展開の段階』『元代までの段階』『明・清代の段階』『現代』という区分が存在している。

今日の課題に応えるためには、つまり、21 世紀における医療の中核たりうる東洋医学の質は、いまだに萌芽的なものとしてしか、医療担当者には把握されていないと言わざるを得ない。そうであるから、その本来の質が実現して展開して行けるように、多くのこと（課題）が果たされる必要がある。その意味から、あらためて『類経』や『鍼灸大成』を、大きく凌駕する歴史的達成の大整理がなされなければならない。

【c】対穴と不射穴などの、穴をセットにした場合の特異な治効の問題の研究課題

【d】基本的病症に対する対応の配穴（または選穴・取穴）と手技選択との問題

【e】経脈の性質と治療的運用の問題と、これとの関連における穴の治効問題

【f】身体部位への特異的な影響問題や、体組織深度への影響性の問題（五体論）や、体成分への影響性の問題

**【g】** ある生理状態に特異的に対応する問題（配穴の類と手技・選択）

「奇病」と言われている「絡病」、「時行疫病」、「瘡病」、他のものとしては、「五臓」「臟腑」「経脈」「絡脈」に分類されている所の、『傷寒雑病論』に記述されている「雑病」とされる幾種類かの基本的な「病証」がある。

これらを、ある特異的な生理的状态として理解して、それらに対応する治療論が歴史的には議論されてきている。この蓄積を整頓して提示し、それを踏み台にしてさらに展開していく必要がある。

**【h】** 病態の理解認識に存在している「裁断の視覚」＝「認識のアルグル」は、その種々のアングルごとに対応・処理は成立する。

例えば、現代医学においては、外来の病因を追及するアングル（細菌・ウィルス・ガス状物・塵埃や杉花粉のような微粒子・振動・騒音・その他）には、抗生物質や中和剤や抗ヒスタミン剤などを病因に応じて投与する。内分泌の異常はどうかという追及アングルには、ホルモン剤や内分泌器官の賦活または抑制剤などを投与する。生体分子の調節という追及アングル（体液の状態の追及）の場合では、輸液を設計したり選択して輸液したり、食事を変更させたり、ビタミン剤などの栄養成分を投与する、等々が行われているように。

**【i】**

◇システム化可能の範囲問題

未完